



【神の愛に一番似た母の愛】

聖書本文:サムエル記第二21章5節-14節・暗唱聖句:エペソ人への手紙6章1-3節

説教者:鄭南哲牧師

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！ゴールデンウィークだった先週一週間はいかがお過ごしでしたか。今日の主日は母の日感謝礼拝としてささげています。教会のすべてのお母さんたち、特に教会のマリア会とハンナ会のお母さん方々の上に主の豊かな慰めと祝福が注がれ、今年も健康であるように心からお祈り申し上げます。

<神が人に下さった一番大切な命令>

もう私自身もすでに5人の子供の親になり、大人になり、父親にもなりましたが、母の前ではいつまでも子供であり、母はいつまでもたよりになる大きい岩みたいな存在であることをさらに気づいています。今日、特にこの礼拝に参加されている母なるみなさんはそのような尊い存在です。神様が特別に母方(ははがた)のうえにいつも健康と天からの慰めと平安がありますように主イエスキリストの御名によって祝福します。

愛するみなさん、キリスト教のほどに親を大事にし、親孝行を強調しているところはありません。神様が下さった旧約の十戒の中人の間で守るべき一番初めの戒めが“親を敬いなさい”でした。

16世紀ブランの改革者だったカルビン先生は聖書が教えて下さる親孝行についてこう言われました。“我々は神様のすべてが理解できなくてまるで矛盾のように見える時がありますが、神の御国に上って行くとすべてが理解できるようになるでしょう。ただはっきりと言えるのは、親孝行をしなかったのに長生きするのは生きるその自体が神様からの罰であることを覚えなければなりません。”これほど、聖書では親を敬うこと、親に従うことを大事に教えて下さっています。

エペソ人への手紙6章でパウロは親へのクリスチャンの責任を強調しながらこれが人が守るべき約束のある第一の戒めであり、家庭が小さな天国のように幸いになるための秘訣と約束として親に従い、親を敬うことによる神様からのその約束の祝福は量的には長生きすることであり、質的には人生が豊かに幸になりことを御言葉で約束して下さいました。

今日聖書本文に戻りまして、エペソ人への手紙6章1-3節に“子供たちよ。主にあつて両親に従いなさい。これは正しいことだからです。「あなたの父と母を敬え。」これが第一の戒めであり、約束を伴ったものです。「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする」という約束です。”だと記されています。

旧約の申命記5:16でも「あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が命じられたとおりに。それは、あなたの年齢が長くなるため、また、あなたの神、主があたえようとしておられる地で、しあわせになるためである。」親を敬いながら生きることが私たちに心身が健康で守られ、家庭が幸せになれるという約束ある命令であることが分かります。

ユダヤ人の知恵の書と言われるタルムードには次のようなことが書かれています。神様は“私の代わりにあなたの母を送り出したのだ。私には背中がないので母を送って子供たちを背負わせたのだ。私には胸がないので母の胸で子供たちを抱かせた。私には命の乳腺(にゆうせん)がないため母を送り出して命の乳腺で子供たちを養ったのだ。私にはあたたかい手で守られないため母を送って彼らを育てたのだ。”つまり神様は神様の代理者として、愛の御手である母を送って人を養われたということです。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！

なぜ神様は地上の多くの人々の中で親を、特にその中で母親の存在を大事にし、重んじていらっしゃるのでしょうか。

それは神の姿と神の愛に一番似ている存在だからではないでしょうか。

<本文の背景>

今日の本文には神の愛に一番似ているある悲しい母の愛について記されています。

イスラエルをダビデ王が治めている時代でした。平和で何でも豊かだったイスラエルになぜか3年間も飢饉が続きました。

あまりにもながらかに飢饉が続いていたので、ダビデ王は神様に聞きました。どうしてイスラエルに飢饉がつづいているのか。そのわけを教えて下さるように懇願し祈ります。すると、神様はダビデ王の祈りに答えて下さいます。ダビデ王の前のサウルの時代、サウルがギブオンというところの多くの人たちを何の理由もなく、殺したからである事を神様は答えて下さいました。

すでに数百年前、ヨシュアがイスラエル人たちをつれて神の約束されたカナンの地を征服した時、このギブオンというところの民たちと神の御名によって盟約を結びました。その理由はギブオンの民たちはカナンに入ったイスラエルの民たちに対して戦いながら追い出す事も、殺す事もしない事を誓った人々たちだったので、おかげでイスラエル民たちも無事新しいカナンの地で定着する事ができました。このギブオンの人たちと結んだ平和の盟約のおかげで数百年間イスラエルも、ギブオンの人たちの間には平和の時代が続きました。

ところが、長年立ってイスラエルの始めの王であったサウルの時代、何の罪もおかしてなかったギブオンの多くの人たちをサウル王は冷酷に虐殺したのです。イスラエルが神様の御名をかけてギブオンの人たちと結んだこの平和盟約を、イスラエルのサウル王がむやみにやぶってしまったわけです。その結果、神様の怒りはイスラエルの地に3年間も以上イスラエルの全地に飢饉をもたらした

のです。

イスラエルの飢饉が神様からの懲らしめである事を知ったダビデ王は早速ギブオンの体表者たちを呼び集め、どのように償(つぐな)ってほしいのかを聞きます。すると、彼らは金銀の報償も意味がないので、命は命で償うように求めます。つまり、ギブオンの人たちを殺すように命じたサウル王本人はなくなったため彼の子どもたち7人をさらし者として彼らに引き渡してくれるようにと求めました。ダビデ王はその願い通り、7人のサウルの子どもたちギブオンの人たちに渡しました。もちろん選ばれたサウルの子どもたち7人本人たちは何の罪を犯さなかったのにも、彼らの父サウルの子とギブオンたちへの犯した罪のため、そしてこれ以上イスラエルの民全体が苦しめられないようにするため引き渡されたのです。

結局ギブオンの人たちはサウルの故郷だったギブアというところにある山の上で7人のサウルの子どもたちをさらし者として(すなわち、みんなの前で首を吊(つ)らせ殺す)殺しました。

愛するみなさん！ここで我々は神様がどうしてこれほど残酷な方法を許されたのか正確にはわかりません。しかし確かな事実は今日私たちが神様の前で犯した自分の罪があった場合、隠しておいて解決しなければ、自分の時代じゃなくても子どもの時代にでもかならずその罪に対する報いと代価を公義と正義の神から受けるようになるので、さっそく主の御前で悔い改める時を見逃さないで赦しを受けなければならないという事忘れないで行きたいと思います。

そして同時に神の前での告白と赦しだけではなく、同時にもしだれかに犯した罪であるならば、具体的な行動で苦しめた人々に直接行って赦しを求め、和解できるようにとめない、努力すべきであることも覚えなければなりません。

これも大切ですが、私が伝えたい本文の大切な内容は別のことです。

本文の箇所に戻って見ましょう。サウルの七人の子どもたちが殺された後の出来事に目を留めて頂きたいと思えます。7人中二人の自分の息子たち(アルモニとメフィボシエテ)を突然なくしてしまった悲しみに満ちているある一人のお母さんが登場(とうじょう)します。今日の本文の8節によると、なくなった7人の子どもたちは中5人はサウルの娘メラブがメホラ人バルジライの子アデリエルに産んだ五人の子たちであって、つまり、サウル王の孫たちでした。そして、二人アルモニとメフィボシエテという名前でサウル王のそばめから生まれ育てられたサウル王の子どもでした。

特に、聖書が注目している人はこの二人の母の姿でした。彼女はアヤという人の娘でありながら、サウル王のそばめであったリツパという女でした。以前サウル王が生きていた時は栄耀栄華(えいようえいが)をきわめていた女でしたが、サウル王がなくなり、愛する息子たちがさらし者とされなくなって艱難辛苦(かんなんしんく)の日々が続いている惨めな女になってしまいました。

10節を見ると、このお母さんリツパは二人の息子たちが殺された山に行って荒布(あらぬの)を脱いでそれを岩の上に敷いて座り、息子たちの死体を昼には空の鳥が、夜には野の獣から守るために毎日、毎晩息子たちの死体の近くにいって見張っていました。

どのぐらい外の岩の上に座って息子たちの遺体を見守っていたと聖書は教えて下さっているのでしょうか。

今日の本文のよりますと、刈り入れの始まりから雨が降る時まで(10節)に書いてありますので、およそ6ヶ月間に当たる期間でありました。6ヶ月間弱い一人の女の身で、朝も夜も遺体のまん前の外で、それとも猛獣たちと戦いながら自分の命より、なくなった息子たちの遺体を守ろうとしていた事は普通の元気な男でもほぼ不可能事ではないでしょうか。なぜこのような事が可能だったのでしょか。その理由はただ一つ、無くなって遺体になっても変わらない二人の息子に対する母の愛のゆえではないでしょうか。

いかに悲しみの中でも深い、濃い母リツパの愛の姿でしょうか。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！よく考えて見て下さい。実は暑いパレスティンの気候なのでもう一日が経つと、早速遺体が臭くなり始めたので、そちらは遺体がなくなるその当日、すぐ埋葬する風習があった事を考えて見ると、6ヶ月間というのは、もう息子たちの遺体はくさくなってしまい、木の上ではほとんど息子の姿がなく、骨しか残って状態じゃなかったでしょうか。

普通の人たちなら、見た目はとにかく遺体が腐って来る間もあまりのにおいで耐えられず、近づくことすらできなかったはずでしょう。夜は山の上で(9節)女一人でいかに恐ろしかったでしょうか。

そこで6ヶ月間夜も、昼も眠れずに、なくなった息子たちの遺体さえも守っていた母リツパの姿を見ながら、みなさんはどう感じられそうですでしょうか。自分の子どもに対する母の愛というのはこれほど、死より強いものである事が分かるのではないのでしょうか。

(ただ、一人でもなく、二人とも自分の子どもを亡くしたから悲しんで衝動的な行動だったとは言えません。

もし単なるそういう事であるならば、5人の子どもたちを亡くした母サウルの王の娘であったメラブはもっと悲しんでいるはずなのに、全然見えてません。聖書にも全然言及されてないです。これは悲しみと死を越え自分の子どもたちを自分の命より大事に愛していたリツパというお母さんの姿ではないのでしょうか。お母さんの愛がどれほどのものであるか少しでも今日の本文を通して知ることができると信じます。)

11節を見て見ましょう。人の想像を超えるほど、なくなった自分の子どもたちへの愛を示していたリツパの行いが全イスラエルに知らされ、ついにダビデ王の耳にまで入りました。リツパの姿で感動を受けたダビデはその母の悲しくて辛い心を何とかして慰めてあげようとしたダビデ王はサウル王の骨とその息子ヨナタンの骨と共に、本来は木の上でかけられたまま放置される予定であった死んだ7人の息子たち全員の骨も集めて盛大にお葬式を行わせ、後王族として共に葬ったのです。

一人の母の切ない愛が、ついに息子たちの死が恥と無駄にならないように変えたのではないのでしょうか。

<母の愛の特徴>

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！みなさんは今日のこの出来事を通して何を教えられますか。今日

の本文の内容で我々が覚えるべき教訓は何でしょうか。

今日の本文の出来事を通して母の愛の特徴を見出すことができますと思います。

1. 子どもの苦しみと恥と共にする母の愛

まず、今日の本文に出ている母リツパの姿を通して教えられる事は、母の愛とは子どもたちの苦しみとともにする愛であった事が分かります。母の愛は自分の子どもの苦しみを自分の苦しみとして抱ける愛です。

今日母リツパは自分の子どもたちの侮辱と恥と苦しみを共にし、一緒に受けるのに逃げませんでした。今山の上で子どもたちが首が吊れられて木にかけられてなくなっていました。しかし、そこには二人の子どもをなくした母リツパ以外にはだれもみえませんでした。親戚たちとか、他の家族たちも聖書には出ていません。もしもここに来たら、サウル王家に対する憎悪(ぞうお)をギブオンの人たちが持っているので、自分たちも殺されるかも知れないと恐れていたかも知れません。サウル王が明確に犯した虐殺の罪の対価だったので、みんな呪っていたところなので、そこに出ようとする勇氣すらなかったかも知れません。

しかし、母であるリツパだけは呪いと恥、危険な場でさえ子どもたちの死を見張りました。息子の苦しみと恥でさえ、一緒にしながら、少しでも子どもの痛み、苦しみを分けて受けようとする存在でした。子どもの悔しさ、侮辱、恥まで母親としてすべて守ってあげたかった母リツパの愛の姿でした。

この聖書のミツパの話を読んだキプリングという詩人はこのように書きました。

“かりに私が一番高い山の上で首を吊って死んだとしても母、ああ私の母よ。あなたは最後まで私を愛して下さる唯一なお方である事を知っています。ああ！私の母よ。”

みなさんが一番苦しい時や恥ずかしい時、みんな離れても最後までそばに残って見守って下さるお方！その存在がお母さんという存在であります。

“母の涙の祈りの中で育った子どもたちは決して滅ぼされない！”という有名な信仰の名言を残した偉大な神学者だったアガスティンは自分が若い時、さまよった息子の人生を祈りと涙を持ってあきらめずにいつも共に行ってくれた母の一生を通して得られた証の告白でした。

大変残念ながら、子どもたちが親の基準に至らず、傷や苦しみ、失敗などしたら、子どもたちを否定し、まったく自分と関係もない人のように子どもに背を向けてしまうような親の話もしばしば聞こえているやばい時代になりました。

ここに集っていらっしゃる姉妹のみなさん！これえだけはかならず覚えて置いてください。お母さんの学歴がどのぐらいなのか、どれほどのお金を持っているかこれらの事は本当は重要な問題にはなりません。

子どもにたちにいつも必要なのは、子どもが失敗をした時、苦しんでいる時、恥ずかしく思われる時、見守れる力、回復させる力、抱き癒せる力を神様は母という存在に特別に与えて下さっている事を信じてください。子どもたちはこの世の最後の自分の見方としてのお母さんを今も求めているかも知れません。みんなが恥ずかしいと言われても、みんなから捨てられたとしても、いつも身近で共に行ってくれるお母さんの愛をどれほど切に求めているか分かりません。

ですから、教会のお母さんである姉妹たちのみなさん、いつも祈ってください。

“神様、私が母です。今日も神さんが預けて下さった神の尊いものとして子どもを相応しく養える力と智慧をお与えください。子どもの痛みを抱いて癒せる母となるように助けてください。子どもたちの悩みを十分に聞く耳とよく理解してあげる心を与えて下さり、一緒に解決していく力をも下さいますように。”

子どもたちのためお母さんにしかできない能力と力を神はお与えて下さっていますから、これからもその愛の力を子どもたちのために十分発揮することができるみなさんとなりますように祝福します。

2. 子供のため信仰の志を立たせ行う母の愛

母リツパが二人の子どもたちの遺体のそばで6ヶ月間も耐え忍びながら過ごすことが出来たのは、だれもが持ってなかった一つ強い信仰の志があったからだと思います。つまり、その信仰の志には神様が決して子どもたちの犠牲が無駄にならないように！たとい父サウルが犯した罪のため変わりにさらすものとなって死んだ息子たちですが、何とかして息子たちの不名誉な死から取り戻して下さるように、そして子どもたちの犠牲によって3年間も続いている国の飢饉の危機をもう神が終わらせ、イスラエル全民を救って下さるように求めています。母リツパの強い信仰と信念がついに通され、ただ侮辱と恥の中木にかけられ死なれた無駄な罪人で終わらず、ダビデ王と神様の心を動かし、ついになくなった子どもたちの身分と名誉は回復され、王族としてサウル王とヨナタンと共に葬られました。

そして、神様も心が動かされ、もうこれ以上イスラエルの全国民が苦しむことがないように3年間も続いていた飢饉を終わらせて下さったのです。母リツパの信仰の志が結局、イスラエルの国民たちにまで彼らは無駄な死、呪いの死じゃなく、イスラエルの救いのためにも払われた尊い犠牲ともなされた事に変えさせたのです。

‘父親は機会をつくるが、母親は人物を作り上げる。’ということわざがあります。

モーセの母は、モーセが小さかったごろしか育ちませんでした。しかし、しっかりと神を愛し、神を信じ、神に従える信仰の教育をさせた結果、モーセが大人になってからも母からおそわった信仰によって神に従い、召しを受けイスラエルの民を救うために、エジプト王国の富と栄華より、神とイスラエルの道を喜んで選び大いに用いられたのではないのでしょうか。

母の胸にある信仰とその志、信念が母の愛の中で育てられた子どもたちの将来こそ、神様からの夢とビジョンを正しく抱き、さらに大いに用いられる事になる事を忘れないで下さい。

ですから、姉妹のみなさん！教会だけではなく、母親として家ででの信仰の教育、子どもたちに変わらない信仰の姿と志を持って子どもたちを育てるべきではないでしょうか。今日、クリスチャンホームの子どもたちが混乱する一番大きな理由は、親の教会での姿と家での生活や姿があんまりにも違うためではないでしょうか。家の中でも子どもたちと共に祝福の祈りがあり、主の御言葉を励まし教え、家庭に礼拝として生きておられる神の臨在を共に経験する事があれば、信仰の変わらない姿を見て子どもたちも何よりも信仰を一番大事にすることに、神様と親密な関係を保って生きる事ができるのではないのでしょうか。

最後に今日の本文で教えられる事は、神様の愛と一番似ている母親の愛というところです。

木の上で死んだ息子たちのそばで6ヶ月間離れずに死体を見守りながら、苦しみを耐え忍ぶ母リツパの姿は、やがてどこかの場面ととても似て部分があると思われませんか。

自分にはまったく罪がないのに人間の罪人たちのすべての罪を背負って十字架に付けられたイエスキリストの姿とその残酷な御子の死を見下ろしながらでも、切なる愛を示して下さった神の愛と似ているではありませんか。

父なる神の愛は私たちがまだ罪人であった時、私たちの身代わりとしてご自分の御子イエスキリストを十字架に付けられました。

何の条件もなく、ただ私たちを選び取り、愛しておられたのが神様の愛です。

この世の愛の中で実は母の愛こそ、この神の愛と一番似ているのではないのでしょうか。

厳密に言うと、夫婦の間での愛も、兄弟の間での愛も、友人の間での愛もある程度条件的な愛ですが、母の愛というのは条件がありません。罪に落ち射ていた人類にとって神様の愛は永遠の命でした。母の愛も子どもたちにはいつまでも命そのものではないのでしょうか。

母の愛というのは子どもたちの人格と生涯を決める大切な鍵になるでしょう。なので、人が自分の人生を振り返ってみる時、他の人との思い出より母から受けた愛の思い出だけはいつもこいしくなるのではないのでしょうか。

ある詩人は30代になくなった自分の母を回想しながら、このように告白しました。

“30代にこの世を去った我が母はどれほど若々しく美しかったか分かりません。僕が鳥一匹殺さずに今まで生きてきたのはいつくしみ深かった母からおそわったのであり、満面にほほえみをたたえる僕の顔は母の顔からのものでした。私の切なる願いの一つ、それはもう一度生まれるとしても僕の母の息子として生まれることである。”

フランスは歴史上69人の王様が政権を握ったと歴史に書かれていますが、ところがこの69人中、たった3人の王だけが民たちから尊敬を受けたそうです。

この3人の王の共通点を分析した結果とっても驚かされる事実が一つあったそうです。それは、3人の王は自分たちを産んでくれた母によって養育されたということでした。他の66人の王たちはみな外部の人たちの面倒を見てもらいながら育ったのです。産んでくれた母を通して子どもが育てられる事は当たり前かも知れませんが、母を通して惜しみなく注いで下さる愛を受け、体験した王こそ、結局民たちをも愛することができるという事実を私たちは見通す事ができるのではないのでしょうか。

母の存在、母の愛というのが子どもたちにとっては当然のように思われても、このフランスの歴史の教訓を通してでも、どちらにせよ母の存在と愛というのは、人生を決める一番大切な影響力を持っている事実が分かります。

この世のすべてのことの中、母の愛というのは神の愛に一番似ていると先ほど申しました。ですから母の愛をよく理解し、受ければ受けるほど、神の愛に対してもよく分かり、より容易く受け入れることができると信じます。

反面、この世で一番恐ろしい事は子どもたちが母の愛を知らないまま成長する事ではないかなと思われそうです。

実際、北朝鮮ではわざわざ子どもたちを赤ちゃんのころからお母さんたちから離れさせて無理やりに託児所に預けるようにさせます。そこには理由があります。つまり、母親の愛の変わり、それを知る前から、共産主義の思想を、金家3代がまるで真の神のように、真の親のように、洗脳教育を注入(ちゅうにゅう)するためであります。

強いて北朝鮮のところだけじゃなくても、今日私たちが住んでいる社会でも様々な深刻な問題の原因を上って見ると、母の相応しい愛を受けてなかったためである事件が多いのではないのでしょうか。

あんまりにも忙しい母親のため十分な愛情を受けずに放置されて育てられたり、子どもたちとゆっくり会話もできず、一方的な母からの乱暴な言葉や虐待で傷だらけで育てられたり、今になっては親の失格すらなさそうな親が子どもを殺したり、捨てたりする深刻な時代にまできています。

だからこそ、愛するみなさん！今の時代に何よりも一番必要で、大切なのが母親の愛ではないのでしょうか。今、教会に共にいらっしゃるお母さん方々の存在はどれほど感謝なのでしょう。今お母さんから愛されて、すばらしい愛を受けている事だけ我々はどれほどの幸せな存在であり、こんなすばらしいお母さん方々を与えて下さった主に感謝しざるを得ません。

今そばにいますお母さんたちを見て見ましょう。そして感謝をこめて祝福しましょう。そして母親たちは、もう一度自分に与えられている神への信仰と愛と母の責任を忘れず、子どもたちのため改めて祈りと御言葉に堅く立った信仰を持って支えつつ、神の愛と一番似ている自分の愛をこれからも惜しみなく注ぎながら養っていく事に決心し、そうできるように祈っていきましょう。

始まったこの5月、さらに祝福されたすべてのクリスチャンプレイズチャーチのお母さん方々と和睦な家庭となります切にお祈り申しあげます。アーメン！